

開催報告

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」主催
2019年度 ワークショップ「マンガの体験、メディアの体験」第6回

マンガというメディア

日時 2019年12月14日(土) 13:30~19:00
場所 早稲田大学戸山キャンパス 36号館 6階 681教室

<第I部> 13:30~

林道郎(上智大学教授)

水平性についてふたたび

伊藤亜紗(東京工業大学准教授)

幻のビジュアルライゼーション

<第II部> 16:15~

宮本大人(明治大学准教授)

〈漫画少年〉はいつ生まれたか

——マンガを「描く」体験の歴史に向けて——

鈴木雅雄(早稲田大学教授)

コマの誕生と漂流

——テプフェール以後に何が起きたのか——

研究部門「イメージ文化史」にて昨年度より継続して開催されているワークショップ「マンガの体験、メディアの体験」第6回(最終回)が2019年12月14日13時半より、早稲田大学戸山キャンパス 36号館 681教室にて、多数の参加者を迎えて開催された。

第1部ではまず上智大学教授の林道郎氏が「水平性についてふたたび」と題して、美術における垂直性と水平性の問題を、ラカン、キットラー、ロラン・バルトの都市論(『エッフェル塔』)、ベンヤミンの複製芸術論などを援用し、1900年ごろに起こった知覚の「地殻変動」に触れつつ、マラルメの詩や正岡子規による俳句の評釈なども例に挙げながら論じた。そのうえで水平性・垂直性の二項対立に対する「斜め」にマンガを位置付ける可能性が示唆され、またマンガにおける「眼」の表現が読者にとって鏡像として機能するための記号となっていること、ダダやキュビズムに対してシュルレアリスムやマンガにおける人形・ロボットのもつ特権性など、魅力的な仮説が提示された。



(林氏はラカンらの議論を援用し美術史の視点から発表をおこなった)

続いて発表した東京工業大学准教授の伊藤亜紗氏は「幻のビジュアルライゼーション」と題して、マンガ的な表現と統合失調症の妄想・幻聴といった「幻」の関係について論じた。伊藤氏はまず統合失調症の当事者によるマンガを紹介しながら、マンガが語り手のみならず各キャラクターの主観を表現するメディアであるという特性や、鈴木雅雄氏の論考「フキダシのないセリフ」と幻聴の関係などについて論を展開した。続いて「当事者マンガ」の先駆けとしての吾妻ひでお『失踪日記』などを入口に、北海道「べてるの家」から始まった「当事者研究」、「外在化」という自助の方法におけるホワイトボードを用いた症状の可視化、マンガエッセイ「ぱびぷべぼ通信」などを扱いつつ、症状の説明ではないダイレクトな表象としての「幻聴・妄想カルタ」へと議論は展開していった。

「幻聴・妄想カルタ」による外在化は、声や振動といった情報としてのみ迫害の妄想を感じていた当事者が、妄想の内容を、施設の仲間たちも参加する形で想像をもとに描いていくことで、いわば民話のような、みんなが知っているがイメージを共有できていないものとして表象する作業である。この結果、当事者の妄想とほかのメンバーによる表象との間に「ズレ」を呼び込み、当事者の中でカルタを通じてストーリーの書き換えを起こすことになった。当事者の経験と仲間たちによる表象とのズレ、および仲間たちによる表象どうしのズレという 2 つのレベルでのズレが生じることで、当事者に「幻」のメタ認知を促すことにもなる。こうしたきわめて興味深い事例が、視覚障害のある子供たちに共有されているオリジナルのキャラクターや、宗教的幻視の絵画による表象などを援用しながら紹

介され、会場の関心をひいた。



(伊藤氏による発表は豊富な事例の紹介で会場からも強い関心が寄せられた)

発表に続いて、林・伊藤両氏および会場からの発言による討議がおこなわれた。まず林・伊藤両氏の間では、散乱する記号とそれらを統合しうる「眼」というラカンのイメージや、ドゥルーズ的なパラノイアとスキゾフレニアの区別、およびそこに期待がかけられた20世紀の在り方と20世紀的な視覚表現であるマンガとの関係などが話題になり、また当事者研究において重要になるメタ認知が、マンガを読むという体験においてはマンガをマンガたらしめる視点でもあることなどに議論が広がった。

さらに、マンガによってラカンの「現実界」と「象徴界」の間に「想像界」が回復されるというとき、それは幼児退行のようなものとみなされないか、というコーディネーターの中田健太郎氏による発言をはじめ、本学の石岡良治准教授および細馬宏通教授による質疑がおこなわれ、登壇者やコーディネーターを交えて活発な議論がおこなわれた。石岡氏は、林氏に対しては1900年ごろの知覚の変動と同様に、「当事者研究」に現れているような2000年代の変動が考えられないかと問いかけ、他方伊藤氏には「べてるの家」で使われているホワイトボードにおける「垂直性」と「水平性」について質問するという形で、二つの発表を架橋した。また細馬氏からは伊藤氏の発表にもとづいて、「妄想」がもつキャラクター性の薄さについての質問があり、それぞれ意義深い議論に発展した。



(第1部は林氏と伊藤氏の討議に会場発言も加えて盛況のうち終了した)

休憩を挟んで第2部では、まず明治大学准教授の宮本大人氏の発表「〈漫画少年〉はいつ生まれたか——マンガを「描く」体験の歴史に向けて」がおこなわれた。

宮本氏はまず豊富な資料を駆使しつつ、少年少女雑誌における漫画の読者投稿を論じた。『漫画少年』の緻密なバックナンバー調査にもとづいて、関係者の回想に含まれる事実誤認をも指摘しつつ、投書欄の案内になかった漫画の投稿が増え、募集が恒常化するとその常連投稿者のなかからプロの漫画家としてデビューする者があらわれたこと、昭和13年10月の「児童読物改善ニ関スル指示要綱」通達以後も漫画の読者投稿募集はなくなり、昭和16年まで続いていたこと、また雑誌への投稿を前提とした通信講座や独習本の登場によって、地方の子供にも漫画家への回路を開いたと思われることなどが紹介された。

ついで豊富な図像資料を援用しながら、この時代の「漫画少年」の活動類型ともいえる木川かえるのケースが、宮本氏による直接のインタビュー内容も交えながら紹介された。さらにそのバリエーションとして、手塚治虫とのちにジャーナリストとなる本多勝一という二人の「漫画少年」の作品群が、学校教育、とりわけ作文教育との関係という視点から取り上げられ、生活綴り方運動の影響下にあった教師のもとで作文も漫画も同様のフィクション創作として扱った手塚と、図画教育の影響で戦闘場面を多く含む戦争漫画を描きつつ、より「建前」に近いところで作文を書いていた本多との対比が示された。また4人目の「漫画少年」として特攻で戦死した山崎祐則の事例が紹介され、実際に戦闘員として軍に属しながら手塚や本多と違って戦闘場面を描かなかったこと、家族宛の手紙では大人び

た候文なども用いるようになる一方で、祖母に宛てた手紙などで漫画の表現が見られることなど、その特徴について語られた。



（宮本氏の発表は豊富な資料を駆使して「漫画少年」の時代背景を明らかにした）

4人目の発表者となった、この連続ワークショップのコーディネイターの一人でもある鈴木雅雄教授は、「コマの誕生と漂流——テプフェール以後に何が起きたのか——」と題して、ストーリーマンガの創始者とされるスイス人のテプフェールと、フランスにおけるその後の世代のマンガを取り上げた。鈴木氏によれば、テプフェールは「コマのなか」ではなく「ページの上」で機能する近代的なキャラクターを発見したが、カムやドレ、ナダールといった後続世代は「コマのなか」で新しいイメージを作り出そうとした。この結果として近代的な「キャラクター」はいったん抑圧されるが、20世紀初頭にアメリカのウィンザー・マッケイが「ページの上」で動くものとしてのキャラクターをより高い次元で再発見したと考えられる。そうした視点から近代的なメディアとしてのマンガの誕生という出来事に歴史的な位置を与えようとするのが、この発表の眼目であった。

鈴木氏の発表のあとは登壇者4名と会場からの発言によるディスカッションとなり、登壇者相互では「キャラ」の問題や、林氏と鈴木氏の発表で取り上げられた「水平性」と「運動」をめぐる問題などについて活発な議論が交わされたほか、会場からは前半でも発言のあった本学の細馬氏や石岡氏のほか、学習院大学教授の夏目房之介氏から、前日におこなわれた森田直子氏によるテプフェールをめぐる講演会の内容の紹介とともに、書き手の側からみたマンガにおける運動の問題への言及がなされるなど、尽きせぬ討議が白熱した。



(鈴木教授は身振り手振りを交えながらマンガにおける運動について発表した)



(登壇者4名によるディスカッションに質問をおこなう細馬教授)

報告・写真：吉田隼人（総合人文科学研究センター助手）